高句麗史の帰属をめぐる韓国・朝鮮と中国の論争

金　　光　林（新潟産業大学）

高句麗は紀元前1世紀頃から紀元668年まで中国東北地域と朝鮮半島北部地域にまたがって存在した東アジアの古代王国である。

高句麗については、従来、朝鮮の古代史と見なされてきたが、1980年代頃から中国の歴史学界において高句麗は中国の歴代の中央政権に隷属・臣属された地方政権であり、そのために中国の歴史に属するという主張がなされた。1980年代頃までは高句麗が中国東北地域だけではなく、朝鮮半島北部地域にまでまたがって存在した点が考慮されたため、一方的に高句麗は中国の地方政権であるという主張よりは、西暦427年に高句麗が現在の中国境内の国内城（吉林省集安市所在）から平壌へ都を移した後は朝鮮の古代史と見なし、高句麗の歴史は中国史でもあり、朝鮮史でもあるという、いわゆる「一史両用」論が主流であった。ところが、1990年代の後半から高句麗は中国の歴代の中央政権に隷属・臣属した地方政権であり、高句麗が領有していた朝鮮半島北部地域も中国人が建国した箕子朝鮮・衛満朝鮮の故地であり、漢四郡が置かれたところであるから、朝鮮半島北部地域も中国の縁故地であり、高句麗は完全に中国の歴史に編入されるべきであるという主張が強まった。特に2002年2月に中国社会科学院が「東北辺疆の歴史と現状に対する系列研究プロジェクト」（略称「東北プロジェクト」、以下本稿ではこの略称を用いる）という研究プロジェクトを立ち上げ、韓国・朝鮮と歴史論争の素地のある古朝鮮・高句麗・渤海の研究を同プロジェクトの重要な課題にしてから、高句麗を中国史として見なすべきであるという主張が中国でさらに強まった感がある。

一方、中国社会科学院の「東北プロジェクト」の実体が韓国に伝わり、中国政府が高句麗史の中国史編入を目的にこの国策研究プロジェクトを推進していると見なされたため、高句麗史を自民族の古代史として当然視していた韓国国民に大きな衝撃を与え、昨年の12月頃から韓国の歴史学界・言論・市民団体からこの問題に対して強い反論・反発の声があがった。韓国政府は最初は高句麗史の中国史編入は中国の歴史学界における一部の主張であり、中国政府の積極的な関与はないと判断し、今年の2月に外交ルートを通して両国間でこの問題を外交争点にせず、学術的次元で解決するという合意をした。しかし、今年の7月に北朝鮮と中国の高句麗遺産がそれぞれに「世界文化遺産」に登録されてから、「新華社」、「人民日報」など中国の代表的な国営のメディアが高句麗を中国の地方政権と紹介し、中国外交部のホームページの「韓国概況」欄に新羅・百済とともに朝鮮の古代三国として説明していた高句麗を突然削除したことから、高句麗史の中国史編入は中国政府の意図であると判断し、中国政府に対して繰り返して是正を求めている。韓国政府は特に中国の国定教科書に高句麗史が中国史として記述される事態は絶対阻止したい構えであり、そのために外交的努力と同時に南北朝鮮の連携を強化しようとしている。韓国政界においても、今年の7月頃から与野党を問わず高句麗史の中国史編入に対する批判が相次ぎ、国会内に高句麗史特別委員会の設置が求められている。そして看過できないのは高句麗史

の中国史編入によって、韓国の国民の中国に対する伝統的な親近感が薄れ始め、反中国感情が急速に広まっているということである。

この問題に対する北朝鮮の反応は現在のところ公式的に出されていないが、北朝鮮の従来の歴史観から高句麗史の中国史編入を容認しているとはとうてい思えない。

一方、中国政府は高句麗史の帰属は学術的次元で解決すべき問題であり、政治問題化すべきではないという見解を公式的に表明している。しかし、2002年2月からスタートした中国社会科学院の「東北プロジェクト」は国策事業の性格が濃く、高句麗遺跡が残る吉林省・遼寧省の地方政府のレベルでは高句麗が中国の地方政権であるという宣伝が強化されている。中国政府が教育現場で高句麗史を中国史として教えるべきだというガイドラインをすでに示したという情報も出ている。韓国の強い反発・抗議にも関わらず、中国のこういう動きが簡単に止まるとは考えられないし、韓国と北朝鮮も高句麗史は民族史の根幹と民族のアイデンティティーに関わると認識しているだけに高句麗史の中国史編入を容認することはないはずである。

日本と韓国・朝鮮の間では、かつて「任那日本府」の実体、高句麗の「広開土王碑」の碑文の内容をめぐって歴史論争が起こったことがあり、1980年代には日本と韓国・朝鮮、中国との間に日本の歴史教科書の記述をめぐって論争になり、外交問題にまで発展したことがあった。今回の高句麗史をめぐる論争もある意味においてはそれ以上に深刻な歴史論争であり、中国と韓国・朝鮮の間の歴史認識の問題だけではなく、東アジア史をどういうふうに捉えるべきか、東アジアにおいて歴史をどういうふうに共有すべきなのかどういう問題でもあり、今後、東アジアにおいて未来志向的地域共同体を形成していく上でも是非解決すべき課題である。

朝鮮と中国は陸地によって国境を接している隣国同士であり、特に古代には中国から朝鮮に移住する中国人が多かったと見られ、そういうことを背景に中国の殷の箕子東来説（箕子朝鮮）、燕の衛満の朝鮮建国説（衛満朝鮮説）が生まれた。こういう伝説が現在は確かな根拠はないとされるが、古代の朝鮮の歴史に中国東北地域と朝鮮半島に流入した中国人が深く関わったことは事実である。後の漢四郡（楽浪郡・臨屯郡・真番郡・玄菟郡）が中国東北地域から朝鮮半島北部地域にかけて存在したのも事実である。しかし朝鮮の歴史に中国人が関わっただけではなく、中国で「遼東」と呼んでいた東北地域には中世以降も朝鮮人の移住が多く、明代には「遼東」に多数の朝鮮人が居住していた事実も明らかになっている。このように陸地によって隣接し、古代から交流が盛んだったために、朝鮮と中国の関係史には相互の一国史だけでは割り切れない交差的部分が存在し、一国史観を脱皮し、より巨視的な東アジア史観によって歴史を証明する必要もある。

しかし、中国で現在強まっている高句麗は中国史という主張はより開かれた東アジア史観の形成を目指すのではなく、却って伝統的な中華中心の天下観（中華思想）の表出であるといっても過言ではあるまい。

中国の学界の高句麗史は中国史という主張はいろいろ論理的に根拠を提示はしているが、やはり根本的な前提は高句麗の旧領土の約三分の二が中国東北地域に残り、高句麗の多くの歴史遺跡がそこに残っているためである。現代の中国では70年代頃までは高句麗史帰属問題が真剣に考慮されたとは思えず、学界では一般的に高句麗史を朝鮮の古代史として理解していた。しかし、80年代から北朝鮮の主体性の強い歴史研究の動向が伝えられ、それに刺激される形で高句麗研究が積極的に行われ始め、西暦427年の平壌遷都以前まで中国の地方政権、平壌遷都以後は朝鮮の古代王朝という、いわゆる「一史両用」論が多く主張されるようになった。この「一史両用」論の根本前提が現

在の朝鮮と中国の鴨緑江を境界線とする国境にあることは容易に推測できる。しかし、90年代後半に入り、高句麗は完全に中国の地方政権であるという主張が有力になりつつあり、中国の一部の学者たちは高句麗を「中国高句麗」という新しい名称で呼んでいる。こういう変化の背景には学術研究の成果が反映されていないとは言えないが、韓国・朝鮮の学界が朝鮮の古代史の領域を中国東北地域にまで比定することへの反発、韓国・朝鮮の国民たちの間に存在する中国東北地域に対する旧領土意識への警戒感、それよりもまして中国の開放化と経済成長により自由な研究と発言ができるようになり、中華的自信感が強くなったことにより近隣諸国に対する配慮よりは伝統的中華中心の天下観が中国の知識人たちの間で台頭していることに関連があろう。伝統的に中国では中華中心の天下観が根強く存在し、中国の王朝と朝貢・冊封関係を結んだ周辺の諸国を中国の属領と見なしがちであった。それに現在の中国でも中国境内で発生した様々な歴史はすべて中国の歴史という「統一的多民族国家論」を堅持しているので、中国境内に存在した高句麗に対して中国史に編入したいという誘惑に駆り立てられやすい。しかし、伝統的中華中心の天下観の台頭により、中国本位で歴史を解釈すればするほど、中国の歴史領域は広がるようになり、それが周辺の韓国・朝鮮ばかりではなく、モンゴル・ベトナム・中央アジア諸国・トルコ、日本を巻き込む歴史論争ないし紛争を引き起こし、周辺諸国の中国に対する不信感と警戒感を増殖させる結果になる。

近代に入り、伝統的な中華中心の天下観（中華思想）はかなり克服されたと思われたが、やはりこれは中国においては依然として克服すべき課題である。前近代における中国の王朝と近隣諸国の王朝との朝貢・冊封関係を国家と国家間における外交的儀礼と見なすのが一般的見解であり、この問題を拡大解釈しはじめると、高句麗ばかりではなく、中国周辺の多くの王朝が中国の地方政権になる。中国の歴史は常に統合と分裂を繰り返し、中国内に一貫して中央政権なるものが存在したわけではない。それなのに高句麗王朝の7百年に及ぶ歴史をすべて中国の中央王朝との隷属・臣属関係に結びつけて時代区分をし、その独立性を認めようとしないのは、自国の歴史と言いながらも高句麗の歴史を矮小化し、歪めることでもある。また、現在の中国領内で起こった過去の歴史すべてが中国の歴史であるかも疑問である。多くの民族と王朝が盛衰を繰り返した東アジアのダイナミックスな歴史を東アジアという巨視的次元ではなく、中華中心の天下観でしか捉えないのも一種の東アジア歴史の不幸である。

中国が「東北プロジェクト」を通して高句麗史を中国史に編入するということが韓国に伝わると、韓国の国民たちに強い衝撃を与えた。例えば、高句麗を中国史だと認めれば、自ずと古朝鮮も中国史であると認めることになり、渤海に関しては朝鮮史との関連性を主張することもできなくなる。そうすると、韓国（朝鮮）の歴史は1千年以上も短縮され、朝鮮半島北部は朝鮮の古代史の領域から消えることになり、民族の始原さえ分からなくなる。そのために中国による高句麗史の中国史編入に激しい反論・反発の声があがった。これは公には報道されていないが、北朝鮮でも同じことが言えるだろう。そのために、昨年の12月頃から韓国では高句麗史に関する国民的関心がさらに高まり、高句麗史に関する学術シンポジウム・討論会・市民講座などが盛んに行われている。一方、中国による高句麗史の中国史編入を契機に、韓国に根強く存在する単一民族史観を反省し、相互に交錯する歴史の部分を東アジア史という巨視的視点から捉えるべきだという主張、韓国の民族主義を止揚し、東アジアにおいて歴史対話を積極的に行うべきだという主張もなされるようになった。

中国の学界にも、「東北プロジェクト」に対する韓国の激しい反発が伝わり、韓国・朝鮮の古朝鮮・高句麗・渤海に対する研究成果を積極的に受

け入れ、学術討論の共催などを通して歴史認識の差異を埋めるべきだという意見も出ている。同時にいきなりの高句麗史の中国史編入に当惑し、批判的に考える中国人も多いという。

今後は、開かれた歴史認識を持ち、合理的な研究成果を尊重し、学問的対話を重ね、東アジア地域社会が未来志向的共同体へと志向していけば、高句麗史の帰属問題はむしろそれぞれの一国史観を脱皮し、より巨視的な東アジア史の中で照明される可能性がある。今年の7月に北朝鮮国内の高句麗遺跡と中国国内の高句麗遺跡がそれぞれ「世界文化遺産」に登録されたのも、中国による高句麗史の中国史編入に利するという憂慮の声はあるものの、高句麗の文化と遺跡の保護・管理の面では望ましいことであり、高句麗に対する国際的関心を高める上でもよいことである。